

アイルランドのバラッド

酒 井 萌 子

はじめに

アイルランド文学はその真価を広く世に知られるまで、長い間イギリス文学の陰にひっそりと隠れていた。アイルランドのバラッドについては、今の所、あまり他国の人々に知られることなく¹⁾、宝は未だ埋もれたままである。

アイルランドのいわゆる伝承バラッドとは、フィアンナ騎士団物語群の詩²⁾を指す。それは、18世紀後半にヨーロッパで一世を風靡したいわゆる「オシアン詩」の源流をなすものである¹⁾。その総数は8万行にも上ると言われている³⁾。最も古いものは12世紀まで遡ると言われ、以来その伝承の流れは絶えることなく、19世紀半ばまで農夫がゲール語（アイルランドの古語）でこれらの歌を歌っていたと言う⁴⁾。

しかしながら、英米のバラッド研究書は殆どと言っていい程、このように豊かなアイルランドのバラッド伝承について言及していない。ましてや我が国においてバラッドと言え、主として *The English and Scottish Popular Ballads*⁵⁾ に収められたいわゆるチャイルド・バラッド (Child Ballad) を指し、アイルランドバラッドについてはその存在さえ知る人は少ないと思われる⁶⁾。そこでこの拙論では、我が国でこれまで殆ど省みられなかった、アイルランドのバラッド伝承を紹介してみたいと思う。

前述したように、フィアンナ騎士団物語を詩で語ったものを、アイルランドではごく普通にバラッドと呼んでいるが、アイルランドの中世文学の大家である Alfred Nutt は、アイルランドのバラッドは、厳密な意味ではバラッドではないと言っている⁷⁾。筆者自身初めてそれらを読んだ時、イギリスのバラッド（以下イングランド及びスコットランドの伝承バラッドを指す）との違いに驚いたものである。

従って本論では、アイルランドバラッドを所謂イギリスのバラッドとの相違に焦点を当てて紹介してみることにする。それによって自ずから、アイルランドのバラッドの特質が明らかになり、同時に上記の Alfred Nutt の指摘がより一層明確になると思われる。

さて、アイルランドバラッドの代表としてここで取り上げる *Duanaire Finn* 『フィンの詩書』⁸⁾ は、17世紀前半にそれ以前の写本から転写されたもので、現存するバラッド集としては最も古く⁹⁾、しかも最も重要な歌集¹⁰⁾ だと言われている。この作品を宗教性、語り口、テーマという三つの観点から見ていくことにする。

I. 宗教性

Lowry C. Wimberly は *Folklore in the English and Scottish Ballads* 『英蘇古謡における民俗』の中で、イギリスのバラッドの最も優れたものは異教的であるが、バラッド全体としては異教とキリスト教の信仰が共存していると言っている¹¹⁾。異教の要素には、たとえば妖精の登場、人間の動物への変身、他界訪問など、またキリスト教の要素としては、聖書の一節が歌い込まれていたり、神かけて誓いをするなど、いずれも多数ある。イギリスのバラッドでは、本来は相対立するこれらの二つの要素は、葛藤することなく様々な形で共存しているのである。

例えば、*Thomas Rhymer* (37)¹²⁾の中で、Thomas は妖精の国の女王に向って、キリスト教での最高の褒め言葉、聖母マリアを指す “Queen of Heaven” を使って「ようこそ、尊き天の女王様」(“All hail, thou mighty Queen of Heaven”) と讃える。また女王が見せる「三つの不思議」の二つ、「正義の道」と「邪悪の道」はマタイ伝7章13, 14節を暗示し、第三の道は女王とトマスが向う妖精の国へ至る道である。このバラッドでは、キリスト教の確立した社会の中で、異教的要素は少しも対立することなく、キリスト教の要素と共に無造作に受容されている。また、この世では悲恋に終わった恋人たちが死ぬと、教会の内と外に埋葬された其々の墓からバラや樺の木が生える (*Lord Thomas and Fair Annet* 73)、或いは、二本の木は教会の屋根の上で絡み合う (*Barbara Allen* 24A) などの例では、

教会に埋葬されて神の国に召されるというキリスト教の死後観と、霊魂は死後も木に宿って永生するという古来の植物信仰とが何の葛藤もなく共存している。

ところがアイルランドバラッドでは、この二つの宗教は其々が明確な流れをなしていて、時には互いに対立し、激しい葛藤を見せるのである。以下でその例を見てみよう。

フィアンナ騎士団物語群は、伝説的には3世紀の Cormac 王の時代に属し、Finn を首領とするフィアンナ騎士団の栄枯盛衰を語るものである。これらのバラッドの語り手は、*Duanaire Finn* (以下 DF) では、Oisin, Cailte, Finn など、かつてのフィアンナ騎士団の勇者達である。彼らは騎士団が滅びた後も5世紀まで異常な長命で生き永らえて¹³⁾、アイルランドにキリスト教をもたらした St. Patrick に、過ぎし日の騎士団の物語を語るのである。ただ、Oisin が主要な語り手であることから、これらは普通「オシアン之歌」と呼ばれている²⁾。

ところで DF の語りの形式を見ると、総数 69 編のうち 20 編が対話体で、49 編が独白体である。詩が対話体の場合には、上述した勇者と St. Patrick との会話形式でストーリーは進展する。だが独白体の場合にも、勇者は明らかに St. Patrick に語りかけていると思われるものが多い。つまりこのバラッド集は、異教時代の生き残りの勇者が異教の物語をキリスト教の聖人に語るという、特異な構造を持っているのである。

ここでアイルランドの異教はどのようなものなのか簡単に触れておこう。古代アイルランドの異教として次のような幾つかの信仰が挙げられる。

まず第一には、人が死後でなく、この世に生きている間に訪れるという、楽園信仰が広く行き渡っていた。前述した、異教徒時代の勇者 Oisin がなぜキリスト教時代まで生き残っていたのか、その経緯を語る物語¹³⁾はこの信仰に基づくものである。

次に、異教の神々 Danann 神族またはその末裔とも言われる妖精への信仰は、土俗信仰として現在でも農村で或いは神話や民話の中で生き続けているものである。因みに Oisin は父 Finn に恋した妖精 Saba の子で、鹿に変えられた母と共に森に住んでいたのを、Finn が見付けて Oisin

(鹿の子)と名付けたのである。

最後に挙げるドルイド教は、ケルト民族の間で広く信仰されていたものである。ドルイド教の教義はもっぱら口頭で伝承されて、正確な記録を残さなかったために、現在では謎多い宗教とされている。ただ、靈魂不滅の思想(再生思想)と魔術の思想がその中心思想で、偶像崇拜や自然事象に対する崇拜があったと言われている¹⁴⁾。ドルイド僧や王などの上層階級を除く一般の人々にとっては、この宗教は自然主義、すなわち自然に学び、自然との生活を愛する、という程のものだったようである。因みにアイルランドが異教からキリスト教へ移り変わったことは、自然主義から精神主義への移行とも言われている¹⁵⁾。従って、下記で述べるバラッド (LIII. *The Bell on Druim Deirg*, LXVII. *The Dialogue between Oisín and Patrick*) で、Oisín が教会の鐘の音と比較して自然の生きものの鳴声を讃えるその思いは、ドルイド教の異教的心情と言えよう。また森を住居とする騎士団の生活の中で、山野を駆け巡る狩猟は彼らの最高の喜びであったが、動物を殺すことに何らの罪悪感も持たないと、その精神性の欠如を St. Patrick に厳しく非難されている。

それでは異教とキリスト教の二つの宗教は、アイルランドバラッドの中でどのように歌われているのだろうか。LIII. *The Bell on Druim Deirg* と LXVII. と *The Dialogue between Oisín and Patrick* で、其々を代表する Oisín と St. Patrick は次のように激しく対立している。

かつてフィアンナ騎士団の勇者だった Oisín は、今は教会に保護を求める身である。その彼が騎士団の生活を懐かしみ、森の動物(鹿、狼など)の鳴き声、黒鳥、雷鳥のさえずり、猟犬の吠える声などが、教会の鐘の音や僧侶の説教や祈りの声に比べてどんなに美しく素晴らしいかを語る。更に加えて教会の鐘の音は彼に苦痛を与えるだけで、もし騎士団の仲間がここにいたら、鐘は壊され、僧侶たちの命さえないだろうとまで言う。このように、彼は自然と共にある騎士団の生活を讃え、祈りに明け暮れ神に捧げる教会の生活を痛烈に批判するのである。一方 St. Patrick は神に帰依しないで、そのように血腥い狩猟や闘いに日々を過ごした騎士団を厳しく咎める。そして Finn 以下騎士団の勇者たちは、異教的生活を送った罰として地獄に囚われていると告げる。

このように異教を代表する勇者とキリスト教の聖人の間では、其々が自然と神を主張して真剣なやりとりが交わされる。

詩全体が、このように対立した両者の会話で終始する上記の2編以外の歌では、二人は其々の主張を断片的に述べている。例えば、Oisín は教会の粗末な食事による空腹に耐えかねて僧侶を呪ったり (XXX. *The Hunger of Grionloch's Church*), また Finn が催した盛大な狩りの様子を生き生きと St. Patrick に語った後に、彼は狩猟の時の様々なもの音——犬の吠える声、鹿の鳴き声など——は教会の鐘の音よりもどんなに快い響であったかを付け加える (LVIII. *The Chase of Slievenamon*)。或いは、もし St. Patrick が騎士団の時代にいたら、教会のお勤めをするより彼らと過ごす方がずっと楽しいと思うに違いないと断言する (LXII. *The Adventure on Slieve Gullen with Dubh Son of Diorfadh and Prowess of Osgar*)。

St. Patrick の方は Oisín に、闘いで人を殺した罪を悔い改めて神を信じるように勧めたり (XXIII. *The Adventure of the Men from Sorcha*), 彼が死んだ仲間の勇者を思って悲しむ時には、福音書に頼るように諭して (XXX. *The Battle of Gabhair*), しきりにこの異教の勇者をキリスト教に向けようとするのである。

ところで、イギリスのバラッドの一つで、宗教バラッドに分類される *The Cherry Tree Carol* (54) がある。この歌は題材を聖書の物語から採っているのであるが、ここで歌われる聖家族のイメージは、以下のように聖書物語から大きく変質している。

ガリラヤで、身籠もっているマリヤと夫ヨセフが果樹園の中を歩いている時のこと、マリヤが夫に「お腹に赤ちゃんがいるからサクランボを取って」と頼む。するとヨセフは「お前に子どもを生ませる男に取って貰ったらしい」とつれなく言う・・・というものである。周知の如くマタイ伝とルカ伝では、神の子イエスはマリヤの処女懐胎によって誕生したと語られていて、ヨセフはマリヤの夫というだけの存在感の薄い人物である。しかしこのヨセフのセリフは、キリストの超自然的生誕という、聖書の中の神性を痛烈に批判して、彼は何と人間的に表現していることか。つまりこのバラッドは聖書の中の非人間的なきれいごとに対する人々の疑いを赤裸々

に表わしていて、福音書の聖なる世界は崩壊し、戯画化されてさえいる。既に挙げた例で、キリスト教と異教の要素が無造作に散在している様を見たが、キリスト教の観点から見ると、イギリスのバラッドではその宗教的色彩は薄いと言えるだろう。

これに比べるとアイルランドバラッドでは、キリスト教と異教の確執を表す St. Patrick と Oisín の間の論争のように、宗教のテーマは何と真摯に取り上げられていることだろう。そしてキリスト教に反発する Oisín と、彼やフィアンナ騎士団を非難する St. Patrick との関係は、何と緊張に満ちていることか。

次にアイルランドバラッドの宗教性について、もう一つの考察をしてみたい。このバラッド集の LVII. *The Dialogue between Oisín and Patrick* には、類似したタイトルの歌が他に2編あって（下記のb）とd））、それらは DF とは別の、時代の異なった二つのバラッド集に収められている。その他に *The Colloquy with the Ancients* 『故老たちの語らい』¹⁶⁾ という、12世紀後半の散文の物語がある。注2に記したように、フィーニアン騎士団物語群には散文とバラッドの二つの表現形式があるが、この物語は現存する散文形式の作品の中で最も古く、長大な作品で（ストークス版で8000行）、文学的にも優れていると言われているものである。騎士団の生き残りの勇者 Cailte, Oisín（主として Cailte）が St. Patrick と共にアイルランド中を旅しながら、彼に丘や湖にまつわる昔の伝説を話して聞かせるというものである。従って語りの形式は、バラッドの、Oisín が St. Patrick に異教の話を語る対話体と同じであるが、バラッドとこの作品には韻文と散文という表現形式の違いがある。勇者が語る話の多くは、Finn と騎士団の偉業についてである。

これらの四つの作品を年代順にまとめると次のようである。

- | | |
|--|--|
| a) <i>The Colloquy with the Ancients</i> | 12世紀後半の散文 |
| b) <i>Dialogue with St. Patrick</i> | 15世紀後半以前のバラッド (<i>The Dean of Lismore's Book</i> ¹⁷⁾) |
| c) <i>The Dialogue between Oisín and Patrick</i> | 16世紀から17世紀のバラッド (DF) |

d) *The Dialogue of Oisín and Patrick* 18 世紀末に筆写されたバラッド
(*The Fenian Poems*¹⁸⁾)

これらを読み比べると、四つの作品には聖人 Patrick と異教徒 Oisín との関係、および聖人像について顕著な相違があることに気付く。以下にこの二つの視点からそれぞれの作品を要約してみよう。

a) *The Colloquy with the Ancients*

これは四つの中で最も古い作品である。物語の始めで、St. Patrick は守護天使に、異教の話聞いても神の怒りに触れないかと尋ねる。守護天使が後代の人々のためにその話を記録するように言うと、安心した彼は深い関心と共感を持って勇者の話に耳を傾けるのである。勇者が「Finn は木の葉が金ならば、波しぶきが銀ならば、すべてこれを分かち与えた」(p. 104) と、首領の家来に対する気前の良さを讃えると、St. Patrick はそれは立派なことだと頷いて、決して異教時代の徳を蔑むようなことはしない。そして勇者が一つの話を終える度に、勇者を労わって礼を述べ、同時に神の祝福を与える。

一方勇者は St. Patrick を心から敬い、その教えに心服して彼の手で洗礼を受ける。両者は別れに際して、「勇者は聖人の胸に顔を埋めて別れを惜しみ、他方 St. Patrick は神の恵みと天国を約束するのである」(p. 37)。

物語は全体としてはキリスト教化されているが、異教性は決して消滅している訳ではない。むしろそれは堂々とその流れを保っていて、しかもキリスト教との間に対立は見られない。聖人はもちろん敬われているが、勇者も、異教時代の立派な人物として聖人から敬意を表されるという具合に、二人は互いに愛し、敬い合って優しい関係を保持しているのである。

b) *Dialogue with St. Patrick*

Oisín のみが語る独白体の歌であるが、タイトルと呼び掛けの言葉から、Oisín が St. Patrick に向って語っていることは明白である。Oisín は、かつてフィアンナ騎士団が居住していた丘に、今や教会が建って僧侶が住み賛美歌が聞えることを嘆き悲しみながら、もし勇者たちが生きていたら、彼らによって聖書や鐘は破壊され、この丘で鐘の音を聞いたり僧侶の姿を見ることはないだろうと激しい言葉をぶつける。しかも歌の最後で、彼はキリスト教徒とは決して相容れないと断言している。

Oisín が独りで語る歌なので、直接に二人の遣り取りから両者の関係を知ることは出来ないが、Oisín のキリスト教に対する激しい反発の言葉から、両者が対立した関係にあることは明白である。

c) *The Dialogue between Oisín and Patrick*

この歌は St. Patrick が Oisín に教会の賛美歌に耳を傾けよと呼び掛ける言葉で始まる。教会の庇護の下にいながら過去の夢にすがっている彼を目覚めさせようとするのである。それに対して Oisín は、賛美歌や鐘の音よりもっと美しい音の聞えた狩猟の有様を生き生きと語り、また Finn の勲功を讃えて、フィアンナ騎士団の生活がどんなに素晴らしいものであったかを主張する。そして St. Patrick に向って、彼が騎士団と共にあのような楽しい日々を送っていたら、神様など忘れてしまうだろうと言う。

一方 St. Patrick は、そうした Oisín を「愚かな老人」とか、「理性を失った者」と蔑み、そのように闘いや狩猟に明け暮れた報いで、Finn は今地獄にいると告げる。驚いた Oisín は、Finn をそこから救い出してくれるように懇願するが、St. Patrick は、彼が生前不信心であった当然の報いだとして、Oisín の願いを冷たく突き放す。Oisín は、もし騎士団の仲間が生きていたら、地獄に攻め入って Finn を助け出すだろうにと、現在の孤独で無力な老残の身を悲しむ。Finn が地獄にいることを St. Patrick が告げるのは、この歌と d) の歌である。

Oisín はキリスト教の真の意味には全く暗く、St. Patrick のキリスト教擁護に対して常に反駁している。St. Patrick の方は、自然の美しさや喜びを讃える Oisín の異教的心情を少しも理解せず、彼の不信心を厳しく非難するばかりの、頑固で狭量な信徒である。

d) *The Dialogue of Oisín and Patrick*

このバラッドは4行句175連の長詩である。Oisín が St. Patrick にフィアンナ騎士団の冒険や狩猟のエピソードを語りながら、二人の間で神かフィアンナ騎士団かの論争が繰り返される。上記の二つの作品 b), c) と同様に、賛美歌の美しさを讃える St. Patrick に対して、Oisín は鐘の音や賛美歌を悪し様に罵り、Finn と共に楽しんだ狩猟の際の猟犬の声やつぐみの啼き声などをひたすら懐かしがる。また、St. Patrick は c) と同

じく、Finn は外敵と勇ましく闘ったと誇らしげに語る Oisín に、彼は不信心の報いで今は冷たい地獄にいと告げて、神への取り成しを願う Oisín に少しも耳を貸さない。

二人の相手に対する理解や思い遣りは全くなく、彼らは b), c) の歌より一層強く其々の立場を主張していて、その対立はこの歌が最も激しい。

以上の四つの作品の比較をまとめると、次のようなことが言える。散文の物語 a) では、聖人と異教の勇者の間に葛藤はなく、優しい関係が保たれていて、イギリスのバラッドに見られるように、キリスト教と異教は調和して共存している。しかし b) 以下のバラッドでは、Oisín はキリスト教への露骨な反発を見せ、他方 St. Patrick は異教を厳しく非難して、両者の間は極めて緊張した対立関係に変る。同時に、a) では愛の教えを説くのに相応しい慈愛に満ちた St. Patrick の人物像は、バラッドではひたすら教義に忠実で頑迷なキリスト教徒に変化し、しかも b) 以下のバラッドでは、時代が下るにつれてこれらの変化は著しくなっている。

因みに Robin Flower によると、19 世紀半ば、これらのバラッドをゲール語で歌う農民の歌い手は、上記の Oisín と St. Patrick が激しく遣り合う場面を特に楽しんで熱弁を奮ったと言う¹⁹⁾。

さて、上記のバラッドには反キリスト教精神が現れていて、これは Alfred Nutt²⁰⁾ や Myles Dillon²¹⁾ の指摘と一致している。しかしながら、この反キリスト教性については、同時に以下のような疑問が起る。

即ち、アイルランドは古来敬虔なカトリックの国であり、現在もなお、世界で最も信仰心の篤い国の一つとして知られている。そのキリスト教の歴史は 432 年の St. Patrick の宣教に始まる。彼は武力ではなく、愛の力で布教したため、この国では一人の殉教者も出ることなく、速やかに人々の改宗が行われたと言う。その結果 7 世紀には、西ヨーロッパでも有数なキリスト教国となって、僧院を中心に文運栄えたアイルランドへ、ヨーロッパから多くの学者が訪れたと言う。

アイルランドのバラッドの発生は西ヨーロッパとほぼ同じ 12 世紀頃と言われている²²⁾、DF に集められた歌は 12 ～ 17 世紀の作品と考えられている²³⁾。つまりこれらのバラッドが人々の間で歌い伝えられていた時代は、この国が確固たるキリスト教国となってから既に時久しく、異教が信仰と

して人々の間に存在していたはずはない。

とすると、バラッドに見られる、したたかに生き残った異教の精神を、どのように解釈したらよいのだろうか。言い換えれば、中世初期の時代から敬虔なカトリック教徒として知られたアイルランドの人々が、なぜバラッドでは反キリスト教の精神を強く歌いあげたのだろうか。

また、アイルランドの守護人として崇められ愛されてきた St. Patrick は、なぜバラッドではこれ程に狭量で、偏屈な僧に歪められてしまったのだろうか。St. Patrick の生涯とその教えを本当に知っている人によれば、バラッドでの彼は不当に扱われていて、そこで描かれる聖人像は真実の姿ではないと言う²⁴⁾。実際に、彼には国花シャムロックを見せて人々に三位一体を教えたという、優しく微笑ましい逸話がある。また先に述べた、この国では一人の殉教者も出なかったという事実は、彼が愛の力でこの国をキリスト教化したことを裏付けるものだろう。

これらの疑問に対する明確な答えにはならないが、アイルランド人の宗教性について、二氏が興味深い指摘をしている。Sean O'Faolain は、アイルランド人の宗教性を、異教主義を根底にしてその上にキリスト教を重ねた、二重性をなすものだと言う²⁵⁾。また大内義一は、アイルランドでは異教が一扫されてキリスト教に移行したのではなく、異教の上にキリスト教が重ねられたにすぎない、従って人々の心の中には異教とキリスト教の二つの流れが同時に存在していて、彼らはこの二つの流れの間を振子のように行ったり来たりしていると言う²⁶⁾。

このような特質はこのバラッド集に於いても明確に現れている。これまでは St. Patrick と Oisín の対立を中心に見てきたが、Oisín はいつもキリスト教を否定して St. Patrick に反発している訳ではない。例えば LIII. *The Bell on Druim Deirg*. LVII. *The Dialogue between Oisín and Patrick* では、Oisín は St. Patrick に向って、首領 Finn や騎士団の仲間が天国に行ったかどうか神様に聞いて欲しいと頼んだり、Finn のために祈って下さいと謙虚に願っている。ただ、聖人が、彼らは生前神を信じないで異教的生活を送ったために今なお地獄の責めに苛まれていると告げると、Oisín は激しく憤って、神を冒瀆する言葉をぶつけるのである。

或いはまた、「天上の神を信仰する、だが鐘の音は自分を苦しめる」と

言ったり (LIII), 神にこれまでの罪を許し乞うて天国を願いながら, 他方では教会の聖務日課を批判する (LXII. *The Adventure on Slieve Gullen with Dubh Son of Diorfadh and the Prowess of Osgar*) などは, キリスト教に帰依しようとしながら異教的心情を捨て切れないで, 両者の間を揺れ動く彼の心を語っている。

このように, 異教の世界に固執するかと思うと, 他方ではキリスト教にすぎるといふ, Oisín の相矛盾した心の動きを, 一編の詩全体で語るものが3編ある (XXIII, LIII, LVII)。その他に多くの歌の中で, 断片的ではあるが, Oisín は振り子のように二つの宗教の間を行ったり来たりする心情を吐露する。彼がキリスト教 (またはキリスト) を肯定したり, 或いは批判 (反発) して異教的心情を表す言葉が, *DF* の全編 69 のうち 30 編の詩の中で見られる。

前者の例を挙げれば, 「私の靈魂のために祈って下さい・・・天国が私に与えられるように」 (XLV. *The Kingship of Cnu Dheireoil with Fionn*) また「私は優しい上人のパトリックを信じ, 天の王が私の神であることも信じます」 (XXXIX. *The Battle of Gabhair*) などである。

後者の例としては, St. Patrick が Oisín にしきりに神への帰依を勧めるのに対して, 彼は「私には天国よりも騎士団の歌う声や狩猟の騒がしい物音の方が大切なのです」 (XXIII. *The Adventure of the Men from Sorcha*) ときっぱりとキリスト教を拒否するなどである。

このように *DF* の作品全体に, Oisín 自身の, 二つの宗教の間を往来する心の動きが見られるのである。教会の鐘の音よりも山に生きる動物の鳴声の方がずっと心楽しいと言い張りながら, 一方でキリストに救いを求めて信仰を告白するという, Oisín の激しく揺れ動く心は, 実はアイルランド人自身の辿って来た心情であって, だからこそこれらの歌は長きに亘って人々の間で伝承され続けて来たのではないだろうか。

ただし, アイルランド人のこのような宗教性の特徴だけでは, 先に挙げたなぜバラッドに強い反キリスト教の精神が表れたかについての十分な説明にはならない。

この拙論では, アイルランドバラッドには, 異教とキリスト教の二つの相反する宗教の明確な流れがあること, そして時には両者は激しい対立と

葛藤を見せ、同時に強い異教の精神、即ち反キリスト教性が表れていることを指摘するに留めて、上記の疑問は今後の課題にしたいと思う。

尚、宗教性に関して、先に述べた Macpherson の作品について補足すると、彼はゲール語から翻訳する際、異教時代の伝承文学の純粋性を汚すとして、キリスト教の要素を一切排除したと言う²⁷⁾。従って当然のことながら、『オシアン』では St. Patrick は登場せず、二つの宗教の間を揺れる勇者の心の動きも見られない。また、聖人と勇者の対話によって二つの宗教が対立し、時には激しい葛藤を見せる *The Dialogue* ものは取り上げられていない。

II. 語り口

G. H. Gerould はバラッドを定義して、「大詰に重点を置いて、批評を加えたり偏見を差し挟んだりしないで、事件と対話で行為を明らかにして、物語を客観的に語る一種の民謡である」と言っている²⁸⁾。そしてこのようなバラッドの語り口について、G. L. Kittredge は次のような特徴を挙げている²⁹⁾。1) バラッドは語り手の考えを述べたり感情や心情を表すことはない。2) 一人称は話し手が数人いる場合を除いて全然使われない。

ところがアイルランドのバラッドにはこれらの特徴は全く当てはまらない。Gerard Murphy³⁰⁾ がヨーロッパのバラッドとの相違点として、この国のバラッドでは三人称はほとんど使われないと指摘しているが、*DF* に於いても、勇者がかつてその一員であった騎士団の物語を、一人称で語るのであって、例外を除いて三人称は使われていない。しかも上記の定義によれば、バラッドの本質と言うべき、展開するストーリーを全く持たず、一つの歌全体が語り手の吐露に終わるものが、*DF* の全69編のうち12編に上る。

例えば、かつての Finn の館の跡を見た Oisín は、そこにあった数々の立派な調度品を思い出して、それらを偲び、或いはまた Finn と共に見事な狩の獲物を持ち帰った勇者の名前を次々に挙げながら、今や彼らがいなことを嘆き悲しむのである (XII. *The Household of Alma*)。或いは、Oisín はフィアンナ騎士団が全滅した「ガウラの闘い」を思い出して、た

だ独り残された悲しみに暮れる (XXVII. *Oisín's Sorrow*)。また、犬の吠える声で Oisín の眼前に、猟犬が群をなして、逃げる鹿を追う盛大な狩猟や、金髪の Lugh がハープを奏でる狩りの後の酒盛りの光景がまざまざと蘇るが、現実に戻ると既に時久しく過ぎていて、Oisín は老いさらばえた我が身に痛哭するのである (XXXII. *The Beagle's Cry*)。

上記の例から明らかであるが、これらは主として、Oisín が騎士団の栄光の消え去ったことを嘆き、キリスト教の時代に老残の身を晒す悲しみを歌うものである。

このように歌全体が語り手の嘆き悲しみを表すものではなくても、歌の途中あるいは歌の終わりの締め括りの句として、「あなたが尋ねる勇者達への思いで、私の心は悲しみに溢れる」(XXXVII. *Fionn's Ancestry*) とか、「今日この話を語る時、私は哀しみに暮れる」(IV. *The Battle of Gríonmhóin*) というような、惨めさや悲しみを訴える語句を持つ歌が 30 編に上る。

このようにこのバラッド集では、過去を回想する歌い手が感情を赤裸々に吐露してその心情を綴る、極めて叙情性の強い歌が多い。それらが客観性、非個人性という所謂バラッドの主要な特質には当てはまらないことは言うまでもない。そして先に挙げた 12 の歌については、平野敬一の「バラッドは単なる叙情、詠嘆のみでは充分でなく、展開するストーリーが必要である」という定義³¹⁾から言えば、バラッドとは言えないことになる。

アイルランドバラッドのこの特性については、この国の歴史に目を向けて見たい。バラッドは長い間人々によって歌い継がれたものなので、それに与える歴史的影響は無視できないからである。

アイルランドは、8 世紀末から 200 年間に亘ったヴァイキングの襲来以来、ほとんど絶え間なく異民族の侵入を受けてきた。1014 年に時の王 Brian Boru のヴァイキング撃退によってしばし平和の時代が続いたが、やがて国内の権力争いがアングロノルマンの侵略を招き、1175 年の Henry II の征服に至る。それはアングロサクソンのチューダー王朝の支配へと続き、やがて Henry VIII はアイルランド国王を名乗って、さらにその支配権を強化するのである。その上イギリスの新教への改宗によって、カトリックに忠実なアイルランドへの扱いはますます苛酷になる。この新

たに加わった宗教面からの弾圧は清教徒 Cromwell に至って熾烈を極め、ドロエダ虐殺を始めとする多くの悲劇が起った。因みに彼はこの国で「最も忌み嫌われる人」として知られている。以後 1922 年に独立を果すまで、異民族・異宗教支配の下でアイルランドは辛酸の限りを嘗め尽くすのである。

このようにアイルランドの歴史を概観すると、3世紀のフィアンナ騎士団の栄えた頃は、キリスト教の来島以前の、未だ異民族の侵入もなく、平和で穏やかな異教時代で、いわばこの国の黄金期であったことが分かる。従って、語り手 Oisín の失われし日々への郷愁は、この国の黄金期に対するアイルランド人の郷愁と重なって、このような種類の歌は人々の強い共感を呼び、大いに人気を博して語り継がれたのではないだろうか。

ところで、Olivia Robertson はケルト民族の庶民の伝統的な性格を分析して、その一つに過去を追憶しがちな特性を挙げている³²⁾。またアイルランド人の民族性については、一種の先祖帰りの傾向があって、それが過去への回帰願望となって表れていると言われている³³⁾。このようにアイルランド人としてだけでなく、ケルト人（アイルランド人はその一分派）の民族的特性から言っても、彼らは未来よりもむしろ過去へ心を向ける民族性を持っていることは否定出来ない。

所謂イギリスのバラッドの、客観性の特質からはほど遠い、過去追想と言う主情に溢れたアイルランドバラッドを読む時、これらが生れ育った土壌として、上記のようなこの国固有の歴史的背景とアイルランド人の民族性を考えるのである。

Ⅲ. テーマ

テーマについても相違点が見られる。F. J. Child によるイギリスのバラッド集の分類では、超自然バラッドと恋愛・悲劇バラッドが、数の上でも物語の美しさの点でも主要なものとされている³⁴⁾。ところが、アイルランドのこのバラッド集については、騎士団の物語という性格上、闘いをテーマにした歌が多いことは不思議ではないが、その数は総数 69 編のうち 24 編にも及んでいる。闘いの内容は次のように分類出来る。

- a) 国内での闘い：9編 フィアンナ騎士団内の二つの党派の争い、または時の王 Cormac と騎士団との闘い（その中で最大の「ガウラの闘い」でフィアンナ騎士団は崩壊する）
- b) 巨人、怪物との闘い：6編
- c) 外敵との闘い：6編
- d) その他：3編

上記の分類の中のc) 外敵との闘いは、この他の8編の中で挿話的に語られている。Alfred Nuttによると、フィアンナ騎士団の物語群は、その発生期から800年ほどの長い歴史を経ているが、その間終始変らない本質的特徴の一つが、海上からやってくる侵略者のテーマだと言う³⁵⁾。

バラッドで歌われている外敵は、海の向うからやって来るのであるが、その目的はアイルランドを征服するため(XXI, LXII, LXIII, LXIV)、或いは貢ぎ物を求めて(LIX)である。彼らが襲来すると、フィアンナの勇者たちは内輪の党派争いも中断して、一致団結して闘う(LXII)。また騎士団と王の軍はしばしば戦うが、一度外敵が現れてアイルランドが危急に瀕するや否や、両者は一体となって外敵に対するのである(LXIII)。

このテーマについてもまた、この国固有の歴史的事実を抜きにしては考えられない。即ち、アイルランドはローマ帝国の征服は免れたものの、前述したように8世紀末のヴァイキングの襲来以来20世紀に独立するまで、殆ど常時外敵の脅威に曝されて来た。この不運な歴史がバラッドに投影されない筈はなく、それが外敵のテーマとして現れているのである。

バラッドで歌われる外敵は、“the Lochlannachs”または“the Norsemen”と呼ばれている。これはこの国で破壊と掠奪を欲しいままにしたヴァイキングを指す。歴史上は1014年に時の王 Brian Boru が自らの命を落として彼らを撃退した、クロンターフの大激戦でその襲来は終わりを告げる。その結果、バラッドが生れたとされる12世紀は、表面上は、1175年のノルマン征服までの、束の間の平和な時期であった。だが実際には、国内の混乱は続き、至る所にヴァイキング侵略の爪痕が残っている中で、人々の心に生々しく刻まれた侵略者への恐怖心は容易に消え去ることな

く、外敵はバラッドの格好のテーマとして歌われ、語り継がれたのではないだろうか。

ヴァイキングの撃退後、再びアングロノルマンに始まる外敵の侵入が続く間、バラッドで歌われる外敵の呼び名は“the Lochlannachs”のままであっても、それを歌い継ぐ人々にとっては、その時々侵略者を指していたに違いない。

因みに、外敵の一人ノルウェイの王 Magnus は二度に亘ってこの国を襲い、戦死したのであるが、ヴァイキング襲来最後の王として人々の心に強く焼き付いていたのであろう、バラッドでは実名で登場している (LXIV, LXVII)。

またバラッドの中の外敵は、この国がほぼ 1000 年もの間異民族に支配されて来たという不幸な事実とは全く逆に、すべて敗北を喫している。フィアンナ騎士団が祖国を守って外敵と闘い、それを打ち負かす物語は、現実の世界で異民族の圧政に苦しむ人々にとって、どんなにか心躍るものであっただろう。同時に人々の侵入民撃退への願いが重なって、それらは一層共感を持って歌われたことと思われる。このように、実現不可能な願望を、バラッドの中で成就させて歌い継いだこの国の人々の心情を思う時、深い感動を覚えるのである。ついにながら、20 世紀初めの独立運動の際、この国で初めて作られた統一組織である人民の秘密結社は、このフィアンナ騎士団に因んで「フィニアン」と名付けられた³⁶⁾。

ところでゲール（アイルランドとスコットランドのケルト人）の人々の間では、Finn と勇者達はただ緑の塚の下で眠っているだけで、いつかは目覚めてゲール人に古の力を取り戻してくれると信じられていたと言う³⁷⁾。そこでは、単にフィアンナ騎士団の首領であった Finn は、ブリテンの Arthur 王のように、祖国存亡の折にはその眠りから目覚めて国を救うという、国家的ヒーローへと変容している。他にも、彼はただ山の洞窟に眠っているだけで、フィアンナ騎士団の戦歌が聞こえて来るや生き返るという伝説がある。Arthur 王もその最も古い伝承では、侵入民のアングロサクソン人によってウェールズに追い詰められた、古代ブリテン島のケルト人の王であった。即ち、英雄の再来を待望する信仰は、このような悲劇の民であるケルト人の間にこそ生まれたと言えよう。

テーマについてもう一つの違いを指摘すると、イギリスのバラッドで最も人気のあるテーマの一つ、恋愛のテーマは *DF* では 69 編の中のわずか 3 編にすぎない³⁸⁾。

おわりに

そもそもヨーロッパでバラッドが生れたのは、ほぼ 12 世紀頃とされている。これはアイルランドでフィアンナ騎士団のバラッドが生れた時期とほぼ一致しているので、Gerard Murphy は両者のバラッド誕生の動きには何らかの関連があると考えている³⁹⁾。例えば、12 世紀にイギリスか或いはアイルランドのノースマン居住地⁴⁰⁾でバラッドを聞いたアイルランド人が、それを非常に気に入って、そのフォームを使って歌い始めたのではないかと言う。

しかしながら、この拙論で見てきたようにアイルランドのバラッドは、主要と思われる三つの点において、イギリスのバラッドとは明確な違いがある。他にも、バラッドに特有な様式化された語り口やリフレンが殆ど見られないことなど、相違点はこれらに留まらない。

バラッドについては、「詩芸術進化の原始段階の一つに属し、各国が其々伝統的なバラッドを持っている」⁴¹⁾と言われている。更に W. P. Ker によれば、フランス、イギリス、ドイツ、デンマークなどの国以外では、純粋なバラッドではなく、独自の物語詩が生れ、発展したと言う⁴²⁾。

以上の考察から、この拙論の結論として、アイルランドのフィアンナ騎士団のバラッドを、12 世紀にヨーロッパでバラッドが発生し流行した流れの中で、この国固有の歴史と民族性によって、イギリスのバラッドとは本質的に異なるバラッドが生れ、発展したもの—— Alfred Nutt に言わせれば、他に適当な文学用語がないために、敢えてそう呼ぶ⁴³⁾——とひとまず定義しておきたい。

この論文の一部は「日本イギリス児童文学学会大会」(1989 年, 大阪)において発表した。

(注)

- 1) ただし、18世紀後半にスコットランドの James Macpherson がスコットランドのケルト地域に伝わった古歌を発表した『オシアン』は、当時ヨーロッパに沸き起こっていたプレ・ロマン主義の気運に乗って、オシアン・ブームを引き起こした。Napoleon I や Goethe の『オシアン』への熱狂的な心酔ぶりは有名である。初版刊行後直ちに次々と各国語に翻訳され、わが国でも『オシアン (ケルト民族古歌)』として紹介された。しかしイギリスから、これは伝承詩ではなく Macpherson の創作であるという批判が起こり、『オシアン』が偽作か否かの大論争が続く。アイルランドはオシアン伝承のアイルランド起源を主張し、Macpherson の剽窃を唱えた。その真偽はともかく、フィン一族の物語はアイルランドからスコットランド、マン島などまで、ケルト民族全体に広く伝わっていたことは確かである。その発祥地であるアイルランドのものは、量的にも質的にも勝っている。また『オシアン』の内容は人物設定を除いて、アイルランドのバラッドとは異なっている。
- 2) フィーニアン物語群、フィアナ族説話団、フィアンナ族説話団などと呼ばれる。騎士団の名 (*fiana*: 戦士の一団の意味) に由来して名付けられ、3世紀頃を舞台に活躍した騎士たちの様々な冒険を語る物語群で、これはそれまでの散文の形式の他に、12世紀以降バラッドという新しい形式が生れて、非常な発展を遂げた。バラッドは騎士団の首領 Finn の息子 Oisín が主な語り手であることから、特に Ossianic ballads (オシアンの歌) の名で親しまれている。因みにアイルランドの古代文学は、これに神話物語群、アルスター物語群を加えて、三つの物語群を持つ。
- 3) Douglas Hyde, *A Literary History of Ireland* (London: Ernest Benn Limited, 1980), p. 498.
- 4) Robin Flower, *The Irish Tradition* (Oxford: Clarendon Press, 1948), pp. 104 — 105. 老人から聞いた著者自身の体験を語っている。
- 5) ハーヴァード大学の Child 教授 (F. J. Child 1825 — 96) が1882年から1898年にかけて集大成した『英蘇古謡集』5巻。
- 6) 日本に於けるアイルランド文学研究の草分けで、その第一人者たる尾島庄太郎の、『アイルランド文学研究』(北星堂書店, 1976) は、この国の上代から現代に至る文学の紹介とその幅広い研究の書である。しかし、そこで取り上げられているのは、注2) で述べたフィーニアン物語群 (オシアン説話団) のうちの、散文の物語だけで、バラッドについては言及されていない。上記の Macpherson の『オシアン』については、『イギリス文学と詩的想像』(北星堂書店, 1972年) で幅広い考察がなされている。
- 7) Alfred Nutt, *Ossian and Ossianic Literature* (New York: AMS Press, 1972), p. 59.
- 8) Eoin Macneill, *Duanaire Finn*, Part I (London: David Nutt 1908),

- Gerard Murphy, *Duanaire Finn*, Part II (London: Simpkin Marshall, 1933), Gerard Murphy, *Duanaire Finn*, Part III (Dublin: The Educational Company of Ireland, Ltd., 1953). Part I は 35 編, Part II は 34 編の, 12 世紀から 17 世紀の歌が, ゲール語とその英訳で書かれている。筆者はもっぱらこの英訳に依る。この作品は 1626 年から 1627 年にかけて, ルーヴェンで二人の修道士によって筆写され, 武将 Sorley Macdonell に献じられた。当時, 故郷 (北アイルランド) を離れてオランダで勤務に就いていた Macdonell を (三十年戦争でスペイン軍に従軍), 故国の古歌で慰めるのがその目的だったという。
- 9) Nutt, *op. cit.*, p. 50.
- 10) マイルズ・デイロン『古代アイルランド文学』(青木義明訳, 横浜: オセアニア出版, 1987), p. 95.
- 11) Lowry Charles Wimberly, *Folklore in the English and Scottish Ballads* (New York: Dover Publications, Inc., 1965), p. 401.
- 12) 以下バラッドの後の数字は Child の番号を示す。
- 13) 異常に長命な人が過去を語る例は, この国の疑似歴史書の『侵略の書』にも見られる。そこでは Noah のように大洪水の難を逃れた Tuan や, ペストで同族の仲間が死に絶えた時独り生き残った Fintan が, 彼らの見聞した古代神話の世界を後の世の人々に語っている。またこの国の神話, 伝説には数世紀前の人の生れ変わりである語り手が, 以前の人物の時代の出来事を語る例がよく見られる。Oisín の長命を説明する物語は全く別種の, 他界訪問の話——美しい妖精に誘われ, 海の彼方の楽園に行った Oisín は至福の日々を過ごした後, 望郷の念止みがたく, 故国に帰って来ると, 300 年の歳月が過ぎていたという——である。これはアイルランドの人々の間で最も人気のある話の一つである。この話の伝承バラッドは残念ながら現存せず, Michel Comyn による創作バラッドが優れたものとして定評があり, 人々に親しまれている。
- 14) 大内義一, 『アイルランドの詩歌』(東京: 開文社, 昭和 53 年), 31 頁。
- 15) 同書, 36 頁。
- 16) Standish H. O'Grady (ed., and trans.), *Silva Gadelica*, Volume 2 (New York: Lemma Publishing Corporation, 1970).
- 17) Thomas M'Lauchlan (ed. with a translation and notes), *The Dean of Lismore's Book: A Selection of Ancient Gaelic Poetry* (Edinburgh: Edmonston and Douglas, 1862). 16 世紀初めに, James Macgregor と Duncan Macgregor 兄弟がスコットランドのハイランズに流布していた歌を収集した *The Dean of Lismore's Book* からオシアンの歌 28 を含めた一部を M'Lauchlan が忠実に英訳したものである。ハイランズはアイルランドと同じケルト民族が住み, 宗教改革以前の当時は, アイルランドと文化的にも密接な関係にあって, フィアンナ騎士団の物語群も広く流布していた。
- 18) John O'Daly (ed.), *Fenian Poems* (London: Johnson Reprint Company

- Ltd., 1972), pp. 2—63. フィーニアン騎士団物語群のバラッド17が集められている。この作品は、1780年にウォーターフォード州の村で学校を開いていた Laurence O'Foran が書き取ったものの、忠実な英訳である。
- 19) Robin Flower, *op. cit.*, p. 102.
- 20) Duncan MacInnes (collected, ed. and trans.), *Folk and Hero Tales* (New York: AMS INC, 1973). Alfred Nutt は巻末の注の, *Development of the Fenian or Ossianic Saga* の中で、異教の精神の再生、あるいは反キリスト教の精神の現れはバラッドにおける極めて顕著な特徴だと言っている。
- 21) ディロン, 同書, 80 頁。
- 22) Eleanor Knott and Gerard Murphy, *Early Irish Literature* (London: Routledge & Kegan Paul, 1966), p. 158.
- 23) Murphy, *Duanaire Finn*, III, p. cxvii.
- 24) Magnus MacLean, *The Literature of the Celts* (London: Kennikat Press, 1970), p. 294.
- 25) Sean O'Faolain, *The Irish* (Harmondsworth: Penguin Books, 1980), p. 31.
- 26) 大内, 同書, 44 頁。
- 27) MacLean, *op. cit.*, p. 298.
- 28) G. H. Gerould, *The Ballad of Tradition* (New York: Gordian Press, 1974), p. 11.
- 29) Sargent, H. C. and Kittredge, G. L., *English and Scottish Popular Ballads* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1932), p. xi.
- 30) Knott and Murphy, *op. cit.*, p. 158.
- 31) 平野敬一『バラッドの世界』(東京: E L E C, 1979), 11 頁。
- 32) 大内, 同書, 1 頁, Olivia Robertson, *It's an Old Irish Custom* より引用。
- 33) W. B. ダンブルトン『アイルランド—歴史と風土と文学』(桑原博訳, 京都: あぼろん社, 1990 年), 4 頁。
- 34) 原一郎『バラッド研究序説』(東京: 南雲堂, 1975 年), 9 頁。
- 35) Nutt, *op. cit.*, p. 32.
- 36) その党員達の死を恐れない戦闘性のために、イギリス人は彼らを「アイルランドのサムライ」と呼んだと言う。堀越智『アイルランド民族運動の歴史』(東京: 三省堂, 1979 年), 90 頁。
- 37) MacLean, *op. cit.*, p. 196.
- 38) Macpherson の『オシアン』は、勇者と娘の悲恋の歌が多い。
- 39) Knott and Murphy, *op. cit.*, p. 159.
- 40) ヴァイキングは侵入すると各地で掠奪を欲しいままにし、そこに居住地を建設した。リムリックはそうにして作られた市の一つである。T. W. ムーディー, F. X. マーチン『アイルランドの歴史と風土』(堀越智監訳, 東京:

論創社, 1982), 100 頁。

41) 福原麟太郎編『文学要語辞典』(東京: 研究社, 1978 年), 30 頁。

42) W. P. Ker, *Form and Style in Poetry* (London: Macmillan, 1966), p. 29.

43) Nutt, *op. cit.*, p. 59.